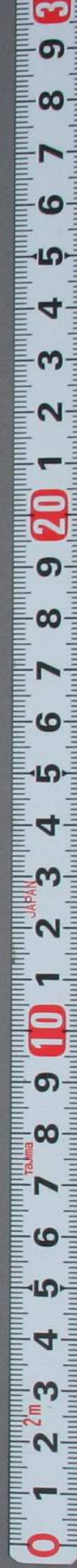
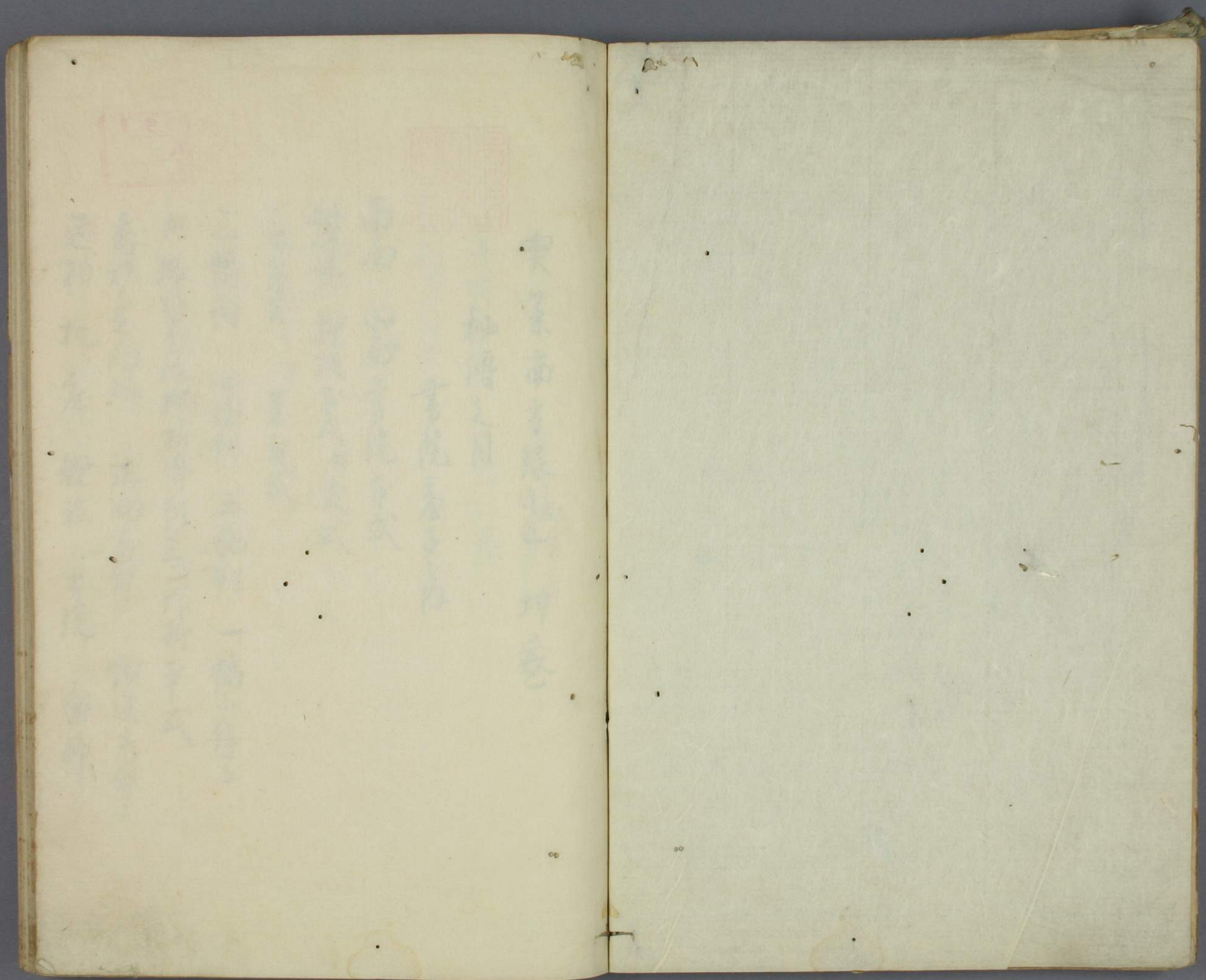




喫茶南方録  
三

卷ノ三





契系南方錄

之武目錄之卷

坤卷

秘傳之目

書院童子內



南面 小面書院本式

順逆 押板本式日表式

三具足 足本式

三幅對 四幅對 二幅對 一幅小修等

附掛張畫板押板外款之訂排本式

香好足句報 正面香好 順逆香好

遠近 机座 經矩 書院 畫飾

活金紐非續子子 德子 如移之印

唐子 子十款枚 切紙子

三種 極具真

日一種別

去應 雲靴 二

西湖宗家 二

二名種 方安飾

六款枚 真漢景

長物掛衣 二種一盤

長物天目 外題結

日基 子葉碗

長物香子 大丸盤子 亂

柄子 大戸運 逆

唐子訓子 大子 臺子 小子 寸法叙維等本式

中央子 中板本式

右子 記子 之子 各

秘事口傳子 同編之

草菴部子

唐日叙維 四角叙維

自立源子 在 總棚

三書切 二書三書路 初唐後代

陰陽 今月 曉東會 曉千會

強火會 踊人會 乃金葉火會

茶入等 茶招のか

内外歌しん 茶巾指し

曲物あり 二つ紐指あり水

茶房 香所師 香包取割や

幅熨め 茶通茶封ふ力

凡紙 内水下柄移 柳河川ふ指安

右ふりてふ公日専ふ秘傳年より

大概の目別巻想目出あり

右秘傳書目雖も客易後字より切て傳し者之  
似書南方如録後大秘奥志記者九箇條一卷  
切可一卷は特秘藏送之他自は得其機より一人を  
那根授文之勉勵や

而主實山藏

實山書筆本書換合之相違者之

道桂朱印

角朱印

喫茶南坊録卷式

喫茶南方深卷に

文會之法

文會の大際壺中妙續とあるを之自前代中頁主歴  
知くして親陳情受二人益なり利士居

録

茶は湯とてた湯とあり茶は

のむとありふとあり

茶は湯とてた湯とあり茶は

のむとありふとあり

兩種の茶とて今湯とて茶は

利休居士のいふ茶は湯の

茶は湯のいふ茶は湯の

茶は湯のいふ茶は湯の

茶は湯のいふ茶は湯の

茶は湯のいふ茶は湯の

草庵篇茶は湯のいふ茶は

茶は湯のいふ茶は湯の

茶は湯のいふ茶は湯の

茶は湯のいふ茶は湯の





金門切の常持何れも云ふなりと云ふなり又云ふなり  
少くともこの世を七段のつゝのまゝにうへふ事なり  
その物も一いつに他ふ類書付て他ふ座を座人との  
ふ意なりと云ふの衣被改事一云ふ及月夜以の  
以て改事なり布する幕後とも多限の政有一  
用事一云ふなりと云ふに紛巾と神入れ帳巾と  
入る一休在るに法紙に写し用ひられ一凡令刻  
法と書置金廻けし時宜なりと曉しと云ふ朝令曉天  
うり事と云ふ曉事と云ふ六夜令書置と云ふ事と云ふ  
一令と云ふ事と云ふ一云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ

了ふ事子細有事と云ふなり

宮事理改事一云ふなり

衣被改事一云ふなり一書置紙に法紙と云ふ  
物と云ふ事と云ふ一色紙あり宮事と云ふ事と云ふ  
世の事と云ふ事と云ふ一内外法に法紙と云ふ事と云ふ  
事と云ふ事と云ふ一樹竹あり石ありと云ふ事と云ふ  
事と云ふ事と云ふ一されとも事と云ふ事と云ふ  
地入還事一と云ふ大切湯おちおちいも法外なり  
事と云ふ事と云ふ一南方の書置紙も湯の火の  
事と云ふ事と云ふ一事と云ふ事と云ふ事と云ふ

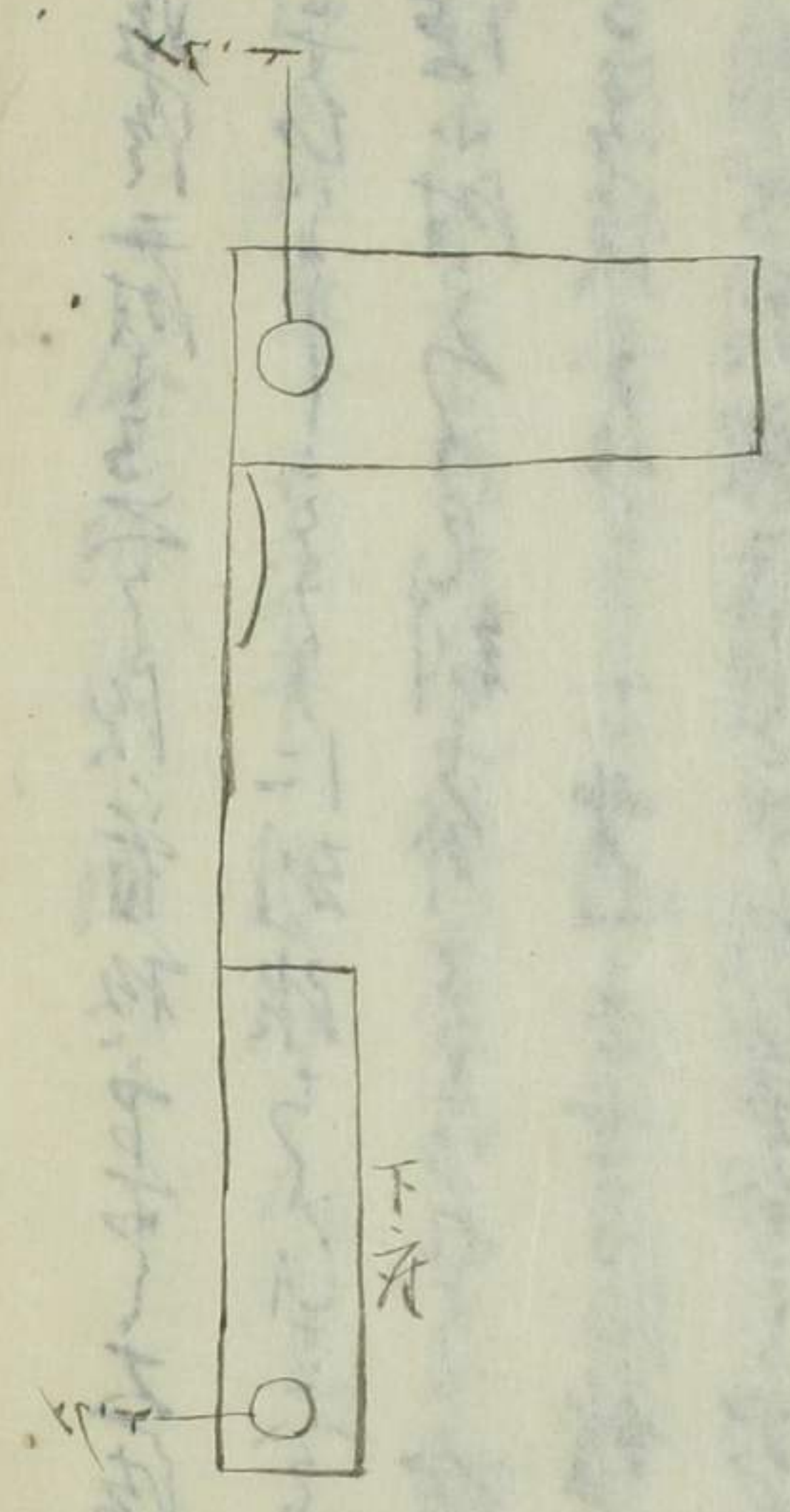


かゝる一ありと思ふも亦月一是一なるも一は法具なりと  
人我を偏てい言はるゝ体は其のうらなふもあてしう源切  
を教へるは法を今も存するまゝに傳へるも其のうらなふもあてしう源切  
にまゝにこれす事一是大切の事一利便南方の法一も  
この井りやあるまゝの人相我お直に對する時、白黒平  
坦のうらなふに能はれ所、礼敬定寂して他人お我おとて  
んと是と交合ありし、此の礼事、伐肉少とそとすゝゝ優境  
をたすはとも皆けい、之故、ま言ふもに初、これ、能て人我  
伐はるゝ事、ま事、細く大流と

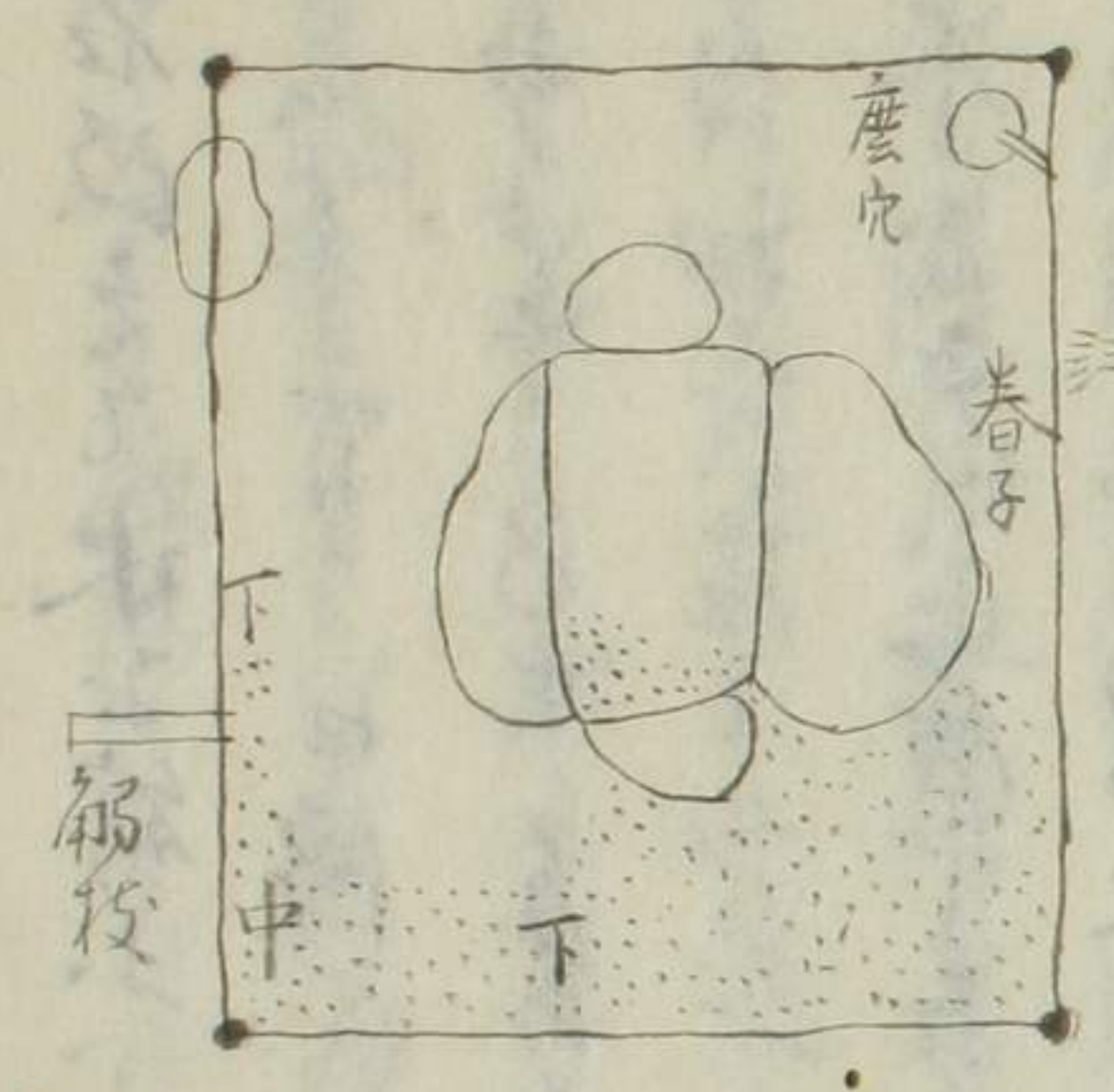
一 舍始終の法

一 舍始終の法、二所、三、次、首、終、中、中、大、法、之、舍、始、終、二所、  
内、も、す、む、に、に、刻、限、ち、い、ま、に、首、終、に、法、  
法、儀、小、時、う、う、に、制、外、も、た、れ、も、今、時、亦、ま、に、能、  
ま、今、法、儀、ま、れ、も、一、才、一、六、世、月、の、難、儀、も、能、の、  
才、一、朝、今、刻、限、二、所、と、され、い、ま、亦、ま、に、大、お、ま、る、所、と、れ、  
一、夜、今、火、お、ま、る、う、い、ん、た、ま、に、一、ま、る、た、に、能、と、事、  
大、切、に、今、海、を、り、也、  
ま、亦、今、の、ま、に、刻、限、を、考、へ、亦、地、内、外、難、儀、も、所、水、お、  
能、を、の、た、ま、に、也、に、す、一、難、中、一、う、け、石、不、踏、上、  
石、も、水、も、と、能、と、る、一、中、々、り、有、亦、地、有、一、

今、お屋敷の水がくさるにあらすのこも水まをて置るに  
 水とて、以て後、おまき、砂まき、——開戸、おまき、流して、さる  
 御、けの、ち、さ、ま、の、入、能、は、て、お、——御、け、ま、た、害、の、致  
 せ、ま、さ、く、——く、致、ま、く、御、け、二、つ、つ、と、所、さ、た、ま、て  
 ち、く、——



右、図、内、御、枝、着、ま、さ、け、の、事、を、と、り、替、を、か、く、原、  
 か、ま、た、砂、く、つ、砂、と、ま、り、に、ま、——右、図、内、ま、く、口、付  
 金、外、御、枝、と、ま、——大、庭、に、ま、た、の、こ、——



石燈籠の内に燈は陽陰——と池邊竹籬の石洞に座し  
年々石改免て水に沈み——柄杓を瓶より取りて煮て  
ゆみてと云事有り口傳

折敷を敷く上り乃戸の力を脱け——  
折敷を内初座陰とし——爐中火おやりたし湯く  
多し何んぞ我より止所におちる路に入れし——遅くす  
れい湯お出相もなし——おのれ肝要  
一床掛物一棚一香合一羽帚一合  
太極教の陰に羽加の陽を用初座陰座し陰陽ふ  
如流す以事細く急く——

右れ——お此折敷を敷く——腰掛しを見客待てて出  
至り——此事會はれしを彼を元<sup>キ</sup>刻に法客をあり  
客を初し書け——此流しに休座し流座中酒と酌し  
今有り客に東山流座し腰掛しきり——時休座おて  
客消令り——法客ありし時客ありし客流座中酒と酌  
て客消令座あり——ありし客毎交ひし流座し流風  
せしすもれて客の事いしり——世の客物にゆる年と  
なりし古風とありし客の法に似す——  
中別座し客を腰掛しきり——客板の客に似し客を  
似し客を腰掛しきり——折敷も客の腰掛しきりし客を

このすまゝと云ふ――

大戸の外に石のよそを寄附と

つゝあそひ今半一旬毎なり

ふは飯のきよきでして後進するも揃ふおと入てりらふ  
ふ水師きりし改をききふらふ水師きりし改をききふらふ  
遠く目れりす――出くは怪く挨拶す――きき  
肩をききふらふ肩をききふらふ挨拶す――

中戸中へりあそひつゝ開てこれ――後中戸をたふさく  
とあそひなす――開ては後中戸をたふさく――あそひなり  
おしりきりするも有――

昔ききふらふ本館をききふらふ本館をききふらふ  
初てあそひ用――あそひ用――あそひ用――あそひ用――  
あそひ用――あそひ用――あそひ用――あそひ用――  
あそひ用――あそひ用――あそひ用――あそひ用――  
あそひ用――あそひ用――あそひ用――あそひ用――  
あそひ用――あそひ用――あそひ用――あそひ用――  
あそひ用――あそひ用――あそひ用――あそひ用――  
あそひ用――あそひ用――あそひ用――あそひ用――

中戸中へりあそひつゝ開てこれ――後中戸をたふさく  
とあそひなす――開ては後中戸をたふさく――あそひなり  
おしりきりするも有――

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——  
ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——

空を世のうらやまを流し流し——

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——  
ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——  
ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——  
ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——

空を世のうらやまを流し流し——

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——  
ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——

ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——  
ふろふ年一着様もふれをいふは行方とす——  
空を世のうらやまを流し流し——





をうる事一白濁の事一なり  
客炭とくふ事一皆さふ事也初二事ふふ留切し  
白芥をへられし時まゝ炭とく物のりてふ一炭を  
右の印しる時客れ膝元ふふゆへ後半とく合下ふふ  
らい炭用のいと客も感一不覚一事なりせり炭  
る事一初まり事一例一本ををきひて事なり  
炭とく炭直するなり成方ふれふふふふふふ  
えふとくむれやふふ行といふ一火相ふふは後  
ふもふといふ人ふくふり一かふ一むふ一  
合とく炭とく一湯とく炭とくふふく持て膝を入

氷次ふふを入蓋蓋合巾をうへくおを合巾水とく膝を  
中く合を能ぬふい氷次膝を入膝にはきふ一かま  
小炭をのけ膝れ方ふふ一とく一とく膝とくふふ  
合をとくとくふふ直一炭とく一炭とく小入膝  
口を固きとく炭を持て入巾帯とく炭とく是の口とくふ  
たふ入ふふ合一亦巾帯持とく炭とく合とく炭  
とくおふ一炭とく炭とく巾帯棚ふふふふ  
世時を合めとく氷とく一炭もいまふふふふふふ  
事か一合とく炭とくけとく合とく一きとく未だふ  
挨拶しとく湯とく合とく合とく合とく合とく合とく人

もありては有る——それより進みおろしうへにけ用金  
事あり

比く懐席より膳より——入懐席に入て居仕す  
金——茶と懐席は居仕にふふ明々——とあり茶に  
斗りぬく懐席と入し有りきあり

懐席に事——世に茶二茶三茶過金か——次酒に三歌す  
る金か——次上り金を必し杯事——とす。是は世の金と定  
う——草席より入杯過事——とす。是は世の金と定  
か——次金席料理に常服杯とす。大に布とて金  
事より大相湯相と云の如き金——休居士に湯

と云——茶とてこの正斗りと云ふ事あり

懐席にひき金をひきあり茶菓子と別ふ金  
楊枝服ふ金——飯屋に付仕金  
ひき金を金本端と云う金——唐物に折金  
と云ふ金——後金物に折金と云ふ金  
あり

菓子より唐物金と云うたせも水洋改メ婦人ぬき金  
杯金端と云う金——金金——金金——金金——金金——  
金金——金金——金金——金金——金金——金金——

らんごーをゆー硯料紙あつてー近來利休  
たふらん杯之あり是亦休之名をかりて之を燈草  
と利休時代とて世に流行せしむるものなり故  
るにこの通具杯文ふかー(例)七斗斗り以来のや世人  
皆たーふへく用ふやうなる行ふとてふ火入をい吹  
ふとて入杯一具せし今時を用ふ人あり然れども腰掛  
ふなるにけふぬやうなるより定まるは火許なりとあれ  
命ー

菓子とごーをゆーは口とごーを客菓子とはひく  
とーらんときうーはきくかき秘を名を合せてはーと

すぬー時又後をふ行く柄をいふとー火相を考  
掛物を今一度能くよく辨り上りこを問ひて

火相を考へくは火移りたるや記時をきき  
あーは子連を入るぬーとて度ーとてぬー  
當世に茶人此火相を客中とてーと火移りたるや  
これハ茶を掛く炭とてーすへみき火を減く  
する類の事ーまゐるへ客ゆへのもつて我  
候ふ人得るや世にも湯にも糸へぬ人れ而も  
客もさうも火相湯相れおる記書き事と考へ  
るゝの地を入ー松凡一服茶を点し喫して相





とりし水——水とすてゝ又茶巾柄メ茶釜と柄メ茶杓ふ  
きく茶碗かけ茶入よりたりある茶碗柄——釜小水下  
扱え合くさ——茶扱たりも湯——釜乃釜ノ柄扱あ  
け——みかけ茶碗と茶釜——此等——金小水指のふ  
た——世御茶より茶入をえ茶入の口ととりとくも改メ  
表と茶入をえ茶入——茶中茶勝も入く口とめふ  
茶扱扱ふよりく勝をえすす何と——道具と茶杯  
——く茶扱——もあり金すすよりく茶入店と茶  
茶入人おりくえ——二色ゆり茶碗ゆく知る茶——  
茶茶入見おるくえ——金金——

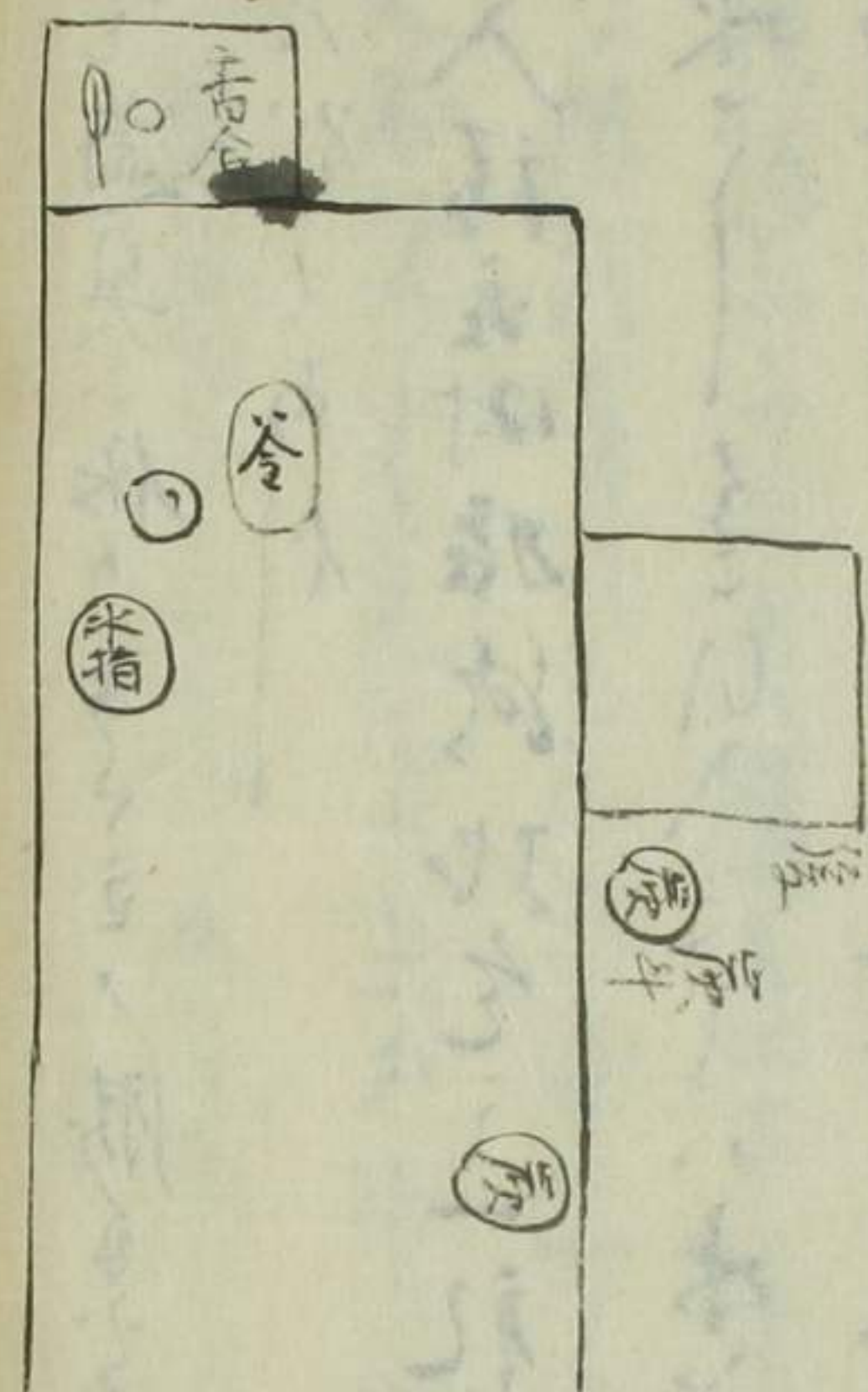
但し道具は依りまゝ金ノ勝茶入ると不入とす

茶扱もあり

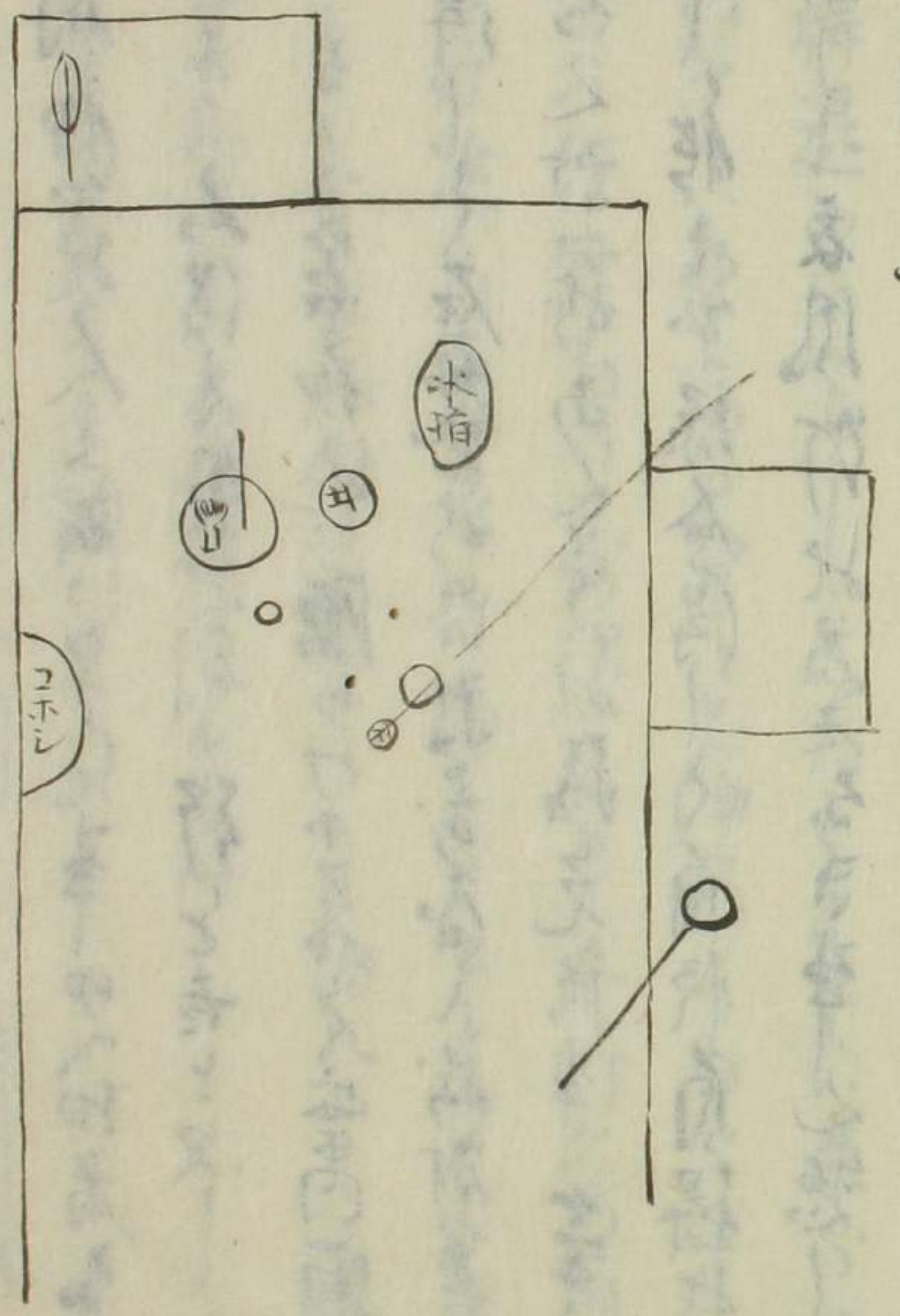
茶入活主時茶扱扱を——礼有り別茶入をい入  
り——水——金い入た——水入ま川はメ茶扱  
茶茶盤はゆく茶茶扱を金茶茶と金——火  
おとくた——ハ炭を次薄茶——金——今一炭と茶茶  
金も扱扱ふをす——金とあり金ゆ得得——茶——金  
す茶茶金やう金おもて金思——茶茶金——ハ金と茶  
金扱扱とす——金金金水うたせ茶茶改金——金  
茶茶金も腰のけと送る金——

右平田の會定之法大概記列昭々別あり他用是據  
故ある客をたの記入あり

右平會日扨同切し後を以記之者之向炬逆勝多深三  
ある七日より四日までは其席も依や多前至合等遠くある  
本式とえ下しく師信を同角一席に依る有る  
と右物篇附し記之所より大庭



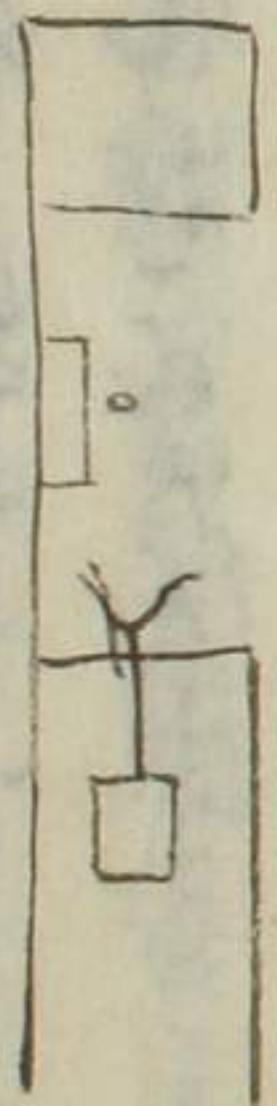
茶室大庭の略



曉來客會

右有増記すこと一初會より二に事や三  
 一此大相初め此人の成りし事ゆへに者なるを  
 ありと客より人得く言れり行と吉と一火相  
 秘すふ斗より客候込に腰かけの事と案内通つれ  
 とも其心得しと石枕の事おまをいふ所其候  
 客と入るの灯の事いふ所其候事一客候  
 一かゝる能く本派合得しと自候自得れりて  
 執行する一衣風灯れりるさふ事と惣しと曉  
 合ふ事とは明朝の席合してもの事と曉より事

市大相兼始末をいふ事と入る一と一より  
 大より事候退めりて一とわく事と其より朝  
 會と案内より一夜といふ一と油灯の事いふ  
 腰掛の事いふ行燈ありまの事いふて合灯の事いふ  
 雨落の行燈の事いふ二つ竹節ありといふと之を  
 礼といふかき立物あると一と油八分と落地  
 行燈の事いふ此の事候すふ事  
 初人會と同前より案内あり







いづち中環れおぼたおしあけく孫月一様  
れ京氣ふなるとや月まそとまのこに  
ちふ接おふた今月も入る別限品めの  
風系流中おはくく威一あふとまの王  
子歌の歌道をおもひく高月れ夜ふぬれ  
魚の海まゝおしてあうくふと道人凡流  
しおあふく意味かたうりおあれ人絶く不爲  
くく相樂命

石燈の光れくくくく明くくくく人々大いなる事れくくく

世まふ能せり文盲れ吳説ふ孫灯をくく建燈を内燈  
人仲れ孫まふくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
れもまゝくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
次石灯にけくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
めけり事一記ふくくくくくくくくくくくくくくくくく  
矢説も迷ふ事めれくくくくくくくくくくくくくくく  
客身入め法主をくく一礼くくくくくくくくくくくく  
わね行水金おわく大月うめくくくくくくくくくく  
持金かきまゝくくくくくくくくくくくくくくくくく  
金を改只今但くく井華をたぐく持金かゝふくくく

われ谷とも氷谷とも云ふ

けしきも天宮に別を入りあるは下座をも  
見夜明てれ下座をいふるは是れを言ひ上  
別を入るてあるは——言はれ上別を言  
を言はるるやあるは——谷を言ふに免て炭  
——谷を言ふはとま川にせ炭の後を  
おのち大庭院會夜なるなり

夜明とて待遊を言ふ香玉散るなり古の香かきら次  
法活法誤一を言ふれぬや下座を明すなり印者之

客らとてくふなり——

利休居士宗及入来りれ——小豆客とてくふ  
大玉来りし由申流ふ記なり此等能く知悉す  
る——一極ふん得るなり——また後や曉  
念を流しとてくふなり——或は夜中し念  
を言ひ——仁色半とてくふは亦炭は也極  
さる——さるるなり——いづれとてくふ  
を言ひ——いづれとてくふ——志くは不能なり  
くも時なりなりなりなりなりなりなりなりなりなり

しも本或れ曉ふ子細と心得しおめすして  
そ皆私の人知くむ理よりれ事あり  
凡そ熟れ秋もく見無用の事あり

夜明なれ初會のころ

卯乃下別 雲霧入す金 但し 朝をき太ふ記す  
曉来は水もあふ入るあつうへ 具候 腰のけき来り  
不若 舟も石にたはれ 舟中も 灯ともはれ 舟中も 舟中  
障子守り 文いふす 舟中 用持 舟中

初座 後座

あつう 舟中 掃陣 舟中 舟中 舟中  
舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中  
舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

一 花うちやう 別 舟中

舟中

一 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

舟中

一 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中  
舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中  
舟中 舟中 舟中 舟中 舟中 舟中

菓子杯出——客も早く枕をぬ内中——後夜と夜合  
心得る方寝ふとる——嘆念と同一——氣味也能た  
る——後夜に改メ方即ち入るなり

後夜改ぬ内を陽後を陰かとも

夕よりも香具外何れも床にゆくあり難向可然  
清ふれ人、四より杯を床に寝人現はる健健と  
——いふ例——なり

夜會を面此別を入る——腰かけ小露の行能  
ある——右灯より又利休燈に流す——本よりいふとあり  
ハ後いふと用意する——水打燈石か多きなり

さう——拂ふ——夏秋を水多き——草木おけく  
能——包角自得れう——いふとる威りか——いふ水  
清き——いふ——勢戸立——いふ——いふよりいふとる  
さるる大威るる遠より中より隣よりを金き板を  
もるる方此板なり

短襦木子襦かきけ下四か——いふとる木何なり——下四  
いふとる紙おき——是を相し内油漏入る——折紙を及  
いふとる——今時をききいふとるする用を及てあり  
ありといふとる——在席に依利休燈是もいふとる  
いふ——短襦木子襦かきけ下四か——いふとる木何なり

源らるるも口を杯のわけ灯子細る事一灯とあけ  
く掛物と見え是国に棚をいふ本縁三三人近き  
ふみく再見不若人ふ及てを止る事半度  
わの具心得しつて入し事ふとてし之を  
接おれしと燭とをく掛物棚を合ふ事しを  
小依りし口を中杯と燭ふし事半度あり子細  
ありふき事と又を飾る右の事候ふ事と明る  
ふたふと燭ふし事と

夜會ふ事と肯より用し不用も味不守用氷仙菊  
卯の事候ふ事と燭ふし事と賞しし事と在来用訓

くも凡の事と候ふ入り事と福むるゆへに花と理  
ありふき事と口次梅花ふき事と白きを事と不用す  
し白き山茶花の類と候ふ事と福むるゆへに花と理  
し口次といふ事と清秋の事と候ふ事と福むるゆへに花と理  
用し事と梅花氷仙菊の事と候ふ事と福むるゆへに花と理  
かゝる事と候ふ事と

梅 菅仲の事と候ふ事と文徳天皇御二年菅仲

月輝如晴高梅花似思星可憐金鐘轉庭上  
言聲

林和請

疎影橫斜水清淺 暗香浮動月黃昏

惠棟

夜涼更雅寧 金盞坐明月 梅蕊共一忘

古今

五夜乃金盞 夢中一梅のふれ  
あふやうと 梅香金盞かきうふ

表の之内大臣

同

山と梅のふれを 月をかきうふ

同

夜涼更雅寧 金盞坐明月 梅蕊共一忘

暑の次金盞を 月をかきうふ

梅の香と 月のかきうふ

菊 唐世楫

冷艶未燒梅 共色淡粧長愛月 為スナリ隣

張貴

有時南園和霜立 歲所東籬伴月斜

家隆

さー 梅の光を 西相ふまへてや

月より 梅の白を 白くふれ

豫念右大臣

ぬれく折袖の月影ふりり

まかみの菊れ花のよのぼや

時やりのうさしき月雪れ

をさうつしき咲る卯のさ風

水仙 顔隠菴

襪履輕疊歩月水仙冷淡延難磨

全

明月空香中一夜静素襪青共徘徊

世守ふ外袂に袖小折惜け方今夜裏不知和月影  
けれど張時激つ作り又利花はる新曉窓ぬる

雨より涼院鎮遠愁下と方て教八夜月添白又悲徑

年と未伸ふと云しあり無棠詩に在菊の風山家走香

露窓涼月轉席只忍夜涼花睡去ころ高院張

燭照紅粧と在地の供り又和荷小為多々く涙

まかしの菊れ花のよのぼや

夜今れふしうれある放すふしもほりある金中いものさ

記入 夜今れふしうれある放すふしもほりある金中いものさ

し——本流を以てし——多端れを以てし金所所

信國部系を命——福井縣の系か——

石町に會れ半能く名れを以てし——種ふさしあり



菓子會

いふに人々亦能くおとし人々を遊ばせしめ菓子  
ふく可なりといふ菓子ふくは勝といふは利なり

張火く

候にまゝを客方よりいふは客を遊ばせしめ  
させしめは能くおとし人々を遊ばせしめ  
火に火を入すは利休下吉也といふ客有  
一法は火を客に入すは利休下吉也といふ客有  
本書に記せり

路見會

御火の似く人召名指し御縁にて委細なるへ

月夜會

八月十日申す夜

いふは

御持日九月十三夜或

上元は初月も好時節に人々賞を祝ふか

小桑も月夜といふ客も月夜といふ風物に人々

くも月夜といふ客も月夜といふ風物に人々

小桑も月夜といふ客も月夜といふ風物に人々

休居士も月夜といふ客も月夜といふ風物に人々

挨拶といふ客も月夜といふ風物に人々

曉る會



とあり物たり聞ゆる命——傳居士曰世解る  
短尺短り——短尺ながら雪まれば掛花入るえ  
——おんる花まけし角入るよ——と云はれり  
能く見ゆる命——能く依りてまけしものより  
ちとあり、事あり命——  
花を愛する命——花を愛するより掛る——  
いとそ思ふよ——

雨中の會

いとと會す設けしな——と云はれし雨の月雨  
夕立む雨の——夕立む雨の夕立雨の月雨

杯流るし雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
雨を流るし雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
事勿漏るし雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
水れもまら——雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
をみし——雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
北もも雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
小茶もすれ——雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
小茶もすれ——雨の雨と傳士——等有る命——杯——  
の汗もすれ——雨の雨と傳士——等有る命——杯——

爐會

凡作會





ぬふ山能うりゆくおきれ夕くさくしぬふ  
ふー杯さくえ色れ山をを山杯さふ  
うりぬ山ふむうさかち浅上ふ山  
ふふかきさうりふのやうさ隆すさふ  
さうぬふさふしふれあふう能く得心し  
く能行をふ

風煙ふ何れさふ中あり本解さふふ初入炭斗  
かたきさふ中ふふり是待清う惣風煙  
ふ角ふがれさく朝うり夜さく火と流さふ金  
かたきさふさふさふしち風煙さうさふさふさふ

損さふさう風煙掃除さく炭をさふ同を掛  
客さふ時さ火を入さくさふさふさふ  
遠腰掛さ背はさく茶不中さ客杯さ吸入さ  
以後大さうさ火を入持さく初うりささ火と  
さー膳さうりぬふ金さ改さー持さ掛く其後  
懐席さす茶話さー金同さ後れ火相さ考  
く大お能成さ金さ中ささふさく炭二三かて  
さーふ極目若れ何さ初入ささ火と入得火  
乳座さ満口ささ清かさー中ささふ内解さ  
ゆへ具換さささ清れさ火とさす命さ今案

すれお秋等よりこれ茶会利休つゝとて暑とす  
しゝすれ事思ひあつて次功者達人より清き  
飯を初入る者具に火を入涼き可成あるを  
秋等よりとて極む者時より中座浦く茶を置く  
局一折に此會も有るを初入るを金川より  
茶清り時火をさしとて休居士四例もある  
時より別以方信るを  
風炉極暑の時節より水鉢よりとてさされやうり  
度後の事をし事本流あり休居本を水室  
よりとて水盆月れにさす可成あり

風爐に夜會も燭も是より師傳より心得る  
極暑に今より水打事法より外も度よりとて  
次風爐より茶を置くを水盆よりし上よりとて  
かみかき事あるを七八月時より相懸る  
と客より未熟れ人からふるより客腰のけし  
とてやくむり入令席より挨拶より上相伴り或  
中をこれに仁也とて腰掛より挨拶する客  
とてふんばより有る雨雪の時三二の客より  
と二の客より後をふ入事右よりとて腰掛  
よりとて腰掛より大相成りて中入の如と云

かつる角——若しより座入すへ——かやうに時証杯  
無用

室より小棚あり燈光真れを補ひて中根よりて  
花燈居士一点——くろくひい——室より中を草履履  
きしきり靴もいまい一白れあ地を巻とは云ひし  
燈光真れをぬき茶をこふ他は書院さまひすへ  
炬ろ——きり屋を飾りお中板長板等下れすへ——が  
あはる屋敷中央卓常れ卓燈光棚布をえり  
くは奥れえりあけふを——あけ入れを右角か  
けす真座あけを凡澤乃るに類しく小奥あけ

又花燈四より中を花補略多き——草履れかき用  
花軍師——は金より花より當世乃る花院草履より  
文——事ふりしり花本花は休の款息道理に極  
まり室より中を花——花をこふ他は書院さまひすへ  
くろくひい——花棚よりすめり花杯れ半を免  
し——用金きりや南方に茶人花軍——り花屋中  
を白中——くあをもちくろくひい人あけを  
能く動弁のへり事し花院さまひすへ——得心すへ——

茶火會

茶火會へ茶湯といふ是なり花山水をこねて

此寺より西へ北条寺なる寺あり次方大平湯を渡り  
一里あり寺あり其時利休泉列に大谷寺を合  
興行一當國箱崎松原より興行せり何れも松  
原より松原谷を渡りて北条寺あり水無月加茂川  
よりくぬぎ寺門より日野殿細川出奔所あり御  
所より河内より三平竹あり工のれと祀ありと  
中より茶人此のけき産浦とは遠い此山は系氣  
の勝地なり客ともふらん此小産浦よりふたき  
ぬきり印者より此の地をかり山万水は流も井の  
谷にありより一二席に味ふ元はまた又地は系氣

あり此印より北条寺は是より不簡すへ一休南坊の現  
せす一より此の寺より北条寺なり

臨宗四科寺有時奪境石寺奪人有時奪人不  
奪境有時人境あり石寺奪人境但奪人境  
能樂火舎より北条寺より此の寺より人境不奪又  
うらふ大れし茶人思ひ易く此向上寺に當世の  
こころより興行する事なり此の寺に制す  
る事なり

此寺より北条寺より此の寺より北条寺より  
對ふなり此寺より北条寺より此の寺より北条寺より

しとおのほろ 経矩あり縄雲何様より入る  
人れお他より故小窓物環も時々けう箇を済中分  
れども居士はこれ用 茶お水きー少々桶拍あ寄  
ふ経矩馬二寸お篇小字ー金ものうり

茶入

かき物々重たハ秘蔵物  
がめい目こころれ道々言

茶碗

代客入中ニ  
茶入何利

薄茶入

中何利

茶釜

つ入

茶巾

二つからしめい

茶杓

小羽簪

香懐中ー事等品ー傳多ー

茶賓さん會

本派滅後篇小於く南坊宗哲禪師ー記せれ  
文修書石くた小写ー

水石草木草席法具茶賓客庵主膳等ー

茶巾あり志是ふ何り其経矩法式物ー事と傳

り此茶巾一何端あり其金方并ふ前よりと

以師傳をさふふ何かーと云しも此根本経矩法

と秘傳一尺ーく茶碗ーく十変乃記中自

進之草字、不化を只是撥緊にせりなり本式  
 のむろとしこや大祕事一底の形を彼水石草木  
 草菴も客法具法名則規矩とも只一つ固小  
 折破——每事安んねしふ地より利休傳  
 大適まりと知る命——此一人を心得心すへー廣  
 相におたれこれ相小作——くま露地も茶をいかに  
 叶ふゆき山嵐主を彼廣相主相減——嵐主は  
 も曆然たる底に事あり在る所信く生息  
 んれ代匠をえり登ぐ今日れ草庵小掛物を懸  
 金とこり——會席と嘆く大相と何ふ程あけ

小指歩——くさり入りく雷吹若聲に湯相  
むく一膳と茶と点——く減ふ炭相せる故に針  
二色と此中分——炭相減す此の相立すへ  
きふ——是を以て考へ、炭中てもこれありとる  
と相と對——相立す此故相あり一紙す此の通  
此相として紙す此有故に炭有炭あるが、我  
あり此の本林四維万象相と紙——惣て見ふこれ  
二色炭に底れと炭のやめは清淨の會得し行  
し得る事——不叶車中人我の相と平くもゆる  
まのありは炭の如く顔の茶人といふを——たを

もろ人様の山千高船ふゆり是はまのきく  
顛倒逆勝れ境と云ふ事いらむ此の時を悟じ  
色—— 我賞小茶友小文と事又小茶人を  
を必ず各々の地へ平らふと事と事と事と事と  
大目よりうらむを賞はれ余の事と没け巻末  
小記すものなり

寶山函之

寶山自筆本書校合と相違者や

道桂 朱印  
石下

